

手順の先にあるもの

北海道教育大学釧路校4年（北海道）

野本 萌絵

「手順に追われてしまっは勿体ない」

令和5年3月、京都での裏千家学生セミナーを受講したことで、私は先生がおっしゃったこの言葉の意味に気付くことが出来た。受講を決心してからは、薄茶・濃茶・茶箱や炭手前などのお稽古をしていただいたが、点前の多さやその工程の複雑さに苦悩した。それでも、全国から集う受講者の皆さんとの貴重な学びの場を大切にしたいと思い、「ここで水指の蓋を開け、ここで水を一杓」と出発直前までただひたすらに頭と体を動かし続けた。

セミナー当日は、緊張感ある雰囲気の中でもお稽古の成果を発揮して、点前をすることが出来た。業躰先生は、置き合わせなどの細やかな位置の決定や、茶入の清め方などを丁寧に教えてくださった。さらに、「なぜそのような動きになるのか」「運びの薄茶とは、何を運ぶのか」といった意味についても、私たちに問いかけながら丁寧に説明をしてくださった。

そうして、これまでは考えたこともなかったような「なぜ」の部分が次々と明らかになっていくことのおもしろさに、私は引き込まれていった。

これらは、点前の流れを理解して臨むことができたからこそ得ることの出来た学びであったと考える。次は何をするかで頭がいっぱいの状態から、一つ一つの動きにこだわったり掛軸やお道具にも目を向けたりすることができるようになった。茶道の世界には、こんなにも様々なものが溢れていたのだと気付くことの出来た瞬間は、この上ない気分だった。

最終日、茶道会館に入ると、掛軸に書かれた「無事」という言葉が目飛び込んできた。私は、この言葉がどのような意味を持つのか考えたが、3日間無事に終えることができたという想像は浅はかだった。事が無いというのは、必要でないものがないということ。自分をよく見せようとするのではなく、ただ、おいしいお茶を差し上げようとする気持ちが大切なのだと、御家元様が教えてくださった。

茶道のことだけを考えて過ごすことの出来た、3日間の学生セミナーを経て、私は手順を越えた先にある茶道の魅力を感じることができるようになった。

普段のお稽古でも、次は何をするのか、に加えて、なぜそうなるのかが気になって先生に尋ねるようになったことから、自身の茶道との向き合い方に変化を感じている。また、茶杓の権先には、歴代宗匠により特徴が見られることや、扱いの異なる七種の蓋置についても学び、お道具をよく考えて選択したり、積極的に用いたりするようになった。

そのような中、最近お稽古の中で迷いが生じた場面がある。それは、お抹茶の量である。2杓入れるタイミングも回数も問題ないのだが、適量であるかが不安だった。「これは少ないでしょうか」と先生に尋ねると、「相手のことを想って加減すると良いよ」と教えて下さった。この状況に、セミナーでの「無事」という言葉が重なった。点前を追究していこうとすると、どうしても角度や量などの見える部分を意識してしまうが、それでも忘れてはいけない「相手を

想う気持ち」の大切さを改めて感じることになった。

私は現在、大学での部活に加えて、先生のご自宅でのお稽古にも通わせていただいている。そこには、中学生から社会人まで、学校や仕事を終えてこられる方がいらっしゃるため、「今日はお仕事を終えて疲れているようだから、少し薄めの方が良いかな」「少しでも温かいお茶を差し上げたい」というように、相手の様子を感じながら一服を点てる意識を持つようになった。思うようにお茶を点てることが出来ず、納得できない顔をしてしまうこともあるが、「そんな顔をしたら、お客様が心配になるでしょう」と先生に指摘していただく度に、自分の求めるものと相手を想うこととのバランスへの課題も感じている。

茶道の手順には一切の無駄がなく、全てが理にかなっていると感じる。しかし、その決められた形の中にも「調整」(思いやり)「裁量」(はたらき)といった幅のある部分があり、相手や場面に応じて、心で動くところは、手順を越えた先にある茶道の良さだと考える。

裏千家学生セミナーという「道」へ一歩踏み出したことが、私の「学び」を広げ深めるきっかけとなった。

これからも、相手を想う無事の精神を大切にして、手順を越えた先にある茶道のよさを追究しながら、日々のお稽古を「実践」し続けていきたい。